

97) Dandy's Approach による深部 AVM の4治験例

畑中 光昭 (十和田市立中央病院 脳神経外科)

深部の AVM は microsurgery の導入をもってしても摘出困難な手術となる事は変りはない。我々はこれまで、第Ⅲ脳室、上位脳幹部に認められた AVM 5例中4例に occipital interhemispheric or transtentorial approach (いわゆる Dandy's approach) による手術を行なったが、手術方法を中心に述べたい。対象は第Ⅲ脳室後半～視床の AVM 1例、側脳室から上位脳幹部 AVM 2例、上位脳幹正中部 AVM 1例で、流入動脈は脈絡膜動脈、後大脳動脈、上小脳動脈で、導出静脈はガレン静脈に注いでいた。4例中、両側後頭開頭2例、1側後頭開頭2例で、摘出2例、摘出及びnidusの焼灼1例、摘出及び流入動脈のクリップ1例を行なった。4例中3例に術中血管写を行なった。

結論：①本法では進入時、最初にガレン静脈が出るが、nidus 到達に際して、案外防害にならなかった。②視野が狭いため、流入動脈、nidus の拡がりが十分把握できず、1例、後大脳動脈を遮断による半盲をみた。③そのためにも術中血管写の重要性を認めた。

98) Contralateral transfalcial approach を併用し摘出した frontal AVM の1例

宗田 庸・根本 仁 (福島県立医科大学) 脳神経外科
太田 守・石井 完治
佐々木達也・児玉南海雄

症例は21才男性で突然の頭痛にて発症した。CTにて右前頭葉に脳内出血および脳室穿破を認め、右内頸動脈撮影にて右前頭葉内側面に2×2×1.5cmのAVMを認めた。Feederはcallosomarginal arteryでmain drainerはnidusの前方で大脳半球間裂を上行し脳表を外後方へ走行した後上矢状洞へ流出していた。Approachに関してはnidusの外側に血腫があるが、feederおよびdrainerが大脳半球間裂にあるためdrainerを損傷せずにfeederを処置するには大脳鎌を切開し対側からのapproachが必要と考え、SSSを中心に両側にまたがる開頭を行った。まず右側の硬膜を切開したが、drainerとの癒着が強く硬膜を翻転できなかつた。そこで対側の硬膜を切開し大脳半球間裂に至り、大脳鎌を切開、callosomarginal arteryのnidusに入るbranch数本を処置した後、nidus全周を剥離した。Drainerがblue veinとなったところで右側からdrainerを処置し、nidusを摘出した。術後、神経学的異常は認められず経過良好で、脳血管撮影

にてもnidusは消失していた。本症例のapproachにつき考察を加え報告する。

99) 妊娠期に出血で発症した MVM (medurally venous malformation) の2例

瓢子 敏夫・佐々木雄彦
荒 清次・宇佐見 卓
岡田 好生・武田利兵衛 (中村記念病院) 脳神経外科
鎌田 二・堀田 隆史
中村 順一
末松 克美 (財団法人 北海道脳神経疾患研究所)

妊娠、分娩、産褥期における母体特有の循環動態の変化は、頭蓋内の環境にも多大な影響を及ぼし、子癇や、頭蓋内出血といった形で発症する事が知られている。頭蓋内出血については、その頻度は少ないものの、重篤な症状を呈し、母体と胎児の管理、妊娠の継続、外心的治療の適応、麻酔等、脳神経外科医にとって直面する課題は多い。我々は妊娠中期に出血にて発症した、MVM (medurally venous malformation) の2例を経験し、本症の出血機序、妊娠との関連等について、文献的考察を加え報告する。

症例1：34才女性、妊娠20週に緩徐に進行する右片マヒと構音障害にて発症し第3病日に当科入院。CTにて小脳出血、脳動脈造影にて左小脳半球全体を灌流するMVMと診断、保存的に治療し軽度小脳症状を残すのみで退院。

症例2：29才女性、妊娠15週に突然の意識障害、右片マヒにて発症。CT上、左前頭葉に脳内血腫を認め、脳動脈造影にてMVM with arterial componentと診断。第2病日に根治術施行、現在リハビリテーション中である。

100) Wyburn-Mason 症候群の1小児例

菊地 顕次・古和田正悦 (秋田大学) 脳神経外科
坂本 哲也
玉川 芳春 (同 放射線科)
桜木 章三 (同 眼科)

Wyburn-Mason 症候群は同一側における1)網膜の動静脈奇形、2)頭蓋内とりわけ視床付近の動静脈奇形、3)眼窩及び顔面の血管性母斑を特徴とする極めて稀な先天性血管異常である。最近、左眼球突出で発症したWyburn-Mason 症候群の1例を経験したので、神経放射線学的に検討し、併せて文献的考察を加え報告する。

症例は7歳女児で、昭和61年5月に左眼球突出と左網膜の異常血管が指摘された。入院時、神経学的に右同名